

Kwansei Gakuin University Research Center for Christianity and Culture

RCC Newsletter

発行:関西学院大学 キリスト教と文化研究センター

http://www.kwansei.ac.jp/c_rcc/index.jsp TEL:0798-54-6019

第三十九回RCCフォーラム講演抄(二〇〇八年二月二日)

宣教「二五〇周年」を迎えるに際して

—どうしたら「%をこえられるか」—

聖学院大学大学院教授 古屋 安雄



琉球に上陸した英国宣教師ベッテルハイムから数えると一六三周年ということも承知しているが、日本本土すなわち横浜と長崎にアメリカの宣教師が上陸してから来年で一五〇周年になるといふことで話をする。現在の教勢はプロテスタント六二万、カトリック四八万、オースドックス二万、計一二二万、〇・八%である。宣教一五〇年の成果はプロテスタント人口が〇・五%ということである。これがどんなに少ないかは隣国と比べると分かる。日本よ

り二五年遅い韓国ではキリスト者は三〇%。約一〇〇〇万、日本より五〇年早い中国では、共産主義にかかわらずではなく共産主義の故に、五%から一〇%、五〇〇〇万から一億といわれている。

韓国と中国と比べて、一%以下の日本の不振が問題になつてはいるが、ナシヨナリズムと結びつかないのが一番の原因であろう。キリスト教とナシヨナリズムが結びつくときに、数量的に伸びることは、キリスト教史の常識である。

またキリスト教が下層階級にまず入るといふのが、キリスト教史の常識である。中国と韓国がそうであった。ところが日本では上層の武士階級が入信した。佐幕派の武士階級とはいえ当時の知識階級であり士農工商の上層階級であった。それゆえに日本のキ

リスト教は一般庶民からは「敷居の高い」宗教となり、神学や聖書学の栄える知的宗教になつてしまった。もっとも数のわりには影響力のある宗教となつたが、頭でっかちの宗教となつた。しかも離教、棄教が少なくない宗教となつてしまった。信仰平均寿命は二・八年という統計もある。「卒業信者」という言葉があるように教会が学校や大学のようになつてしまった。教えを強調することは、キリスト教、教会、牧師、説教などの訳語にも示されている。

現代の無教会伝道者高橋三郎は宣教一五〇周年の成果を見て日本伝道は失敗したと公言している。それゆえに私はアメリカの日本研究者ハウズがかつて「a happy coincidence of attitude」と言つた事は問題ではないかと思つている。これは、ヘブ

バーン、バラ、ジェーンズ、クラーク、デヴィスと言う5人のアメリカ人と、海老名、小崎、本多、植村、内村という5人の明治初期のキリスト教指導者の間に、幸いな一致を見出しているが、これはむしろ不幸な一致と言ふべきでないか。両方とも高度の知識を持った知識人であり、厳格な禁欲的なピューリタン(禁酒禁煙)と儒教的な禁欲的な武士の倫理道德的な態度が結びついたからである。

キリスト教と武士道とが結びついたために、ミッションから独立したが国家に迎合し、より罪深い侵略戦争と妥協し協力するキリスト教となつたのではないか。新渡戸稲造の武士道(彼自身は平民道)の成功をみて、「武士道と接木されたキリスト教が最善の産物」と考えたのは内村鑑三である。

したがって、戦時中のキリスト教が軍国主義と妥協したのは武士的キリスト教の帰結ではあるまいか。内村自身は日露戦争で非戦論を唱えたが、彼の弟子である塚本、黒崎などが戦争を肯定したのは偶然ではない。日本基督教団の「大東亜共栄圏のキリスト



現在のプロテスタント・キリスト教の問題は、若者が来

II

者への書簡」が内村を引用した所以である。武士はもともと戦争をする人である。

また外国から見て日本のキリスト教の牧師あるいは教師中心主義を指摘されるが、それはただ説教を聞いている、伝道しない「動かない信徒」(Frozen People)が多いからである。ちなみに今でも「信徒」と呼ぶのは戦前の戸籍の「士族」と「平民」の名残であろう。

ないということである。かつて日本の教会が「学生の教会」と呼ばれたことが嘘のようである。これは学生が変質したからである。進学率が一五%を超えるとエリート大学からマツス(大衆)大学へと変わる。大学紛争がわが国でも起こった六〇年代から七〇年代は二〇%を超えたからである。今では四〇%が学生であって、彼らはもはやエリートではない。

若者は書物を読まないといわれる。漫画、テレビ、携帯の青年であるが、彼らは観念的ではなく体験的である。このことを教会はどれだけ理解しているであろうか。今の若者は教会には来ないが、ワークキャンプなどでアジア諸国には行く。そこで初めて土に触れ、動植物に出会い、人間とは何か、社会とは何かを考える。そこで素朴なキリスト者に出会い、キリスト教に関心を持つ。ところが牧師たちは観念的な積義的な説教をしている。

アジア学院のアジアやアフリカからの研修生は日本の教会から失望して帰ってくる。あんな葬式のような礼拝には行きたくない。そういうえば、半分以上の結婚式はキリスト

教式なのに、彼らは教会には来ない。招詞で「喜べ」と言うが、一つも嬉しそうな顔をしていない。福音(Gospel)というのに、何故、喜びの要素がないのか。

やはり、最初の入信者が武士だったからではないか。「武士はくわねど高楊枝」と言うように演技をするからではないか。感情を直接表現するのははしたない。ホームステイや留学で外国で洗礼を受け、楽しい教会の交わりを経験した学生たちが、帰国して教会にいつかない。高齢者ばかりで、内向きで、厳粛な礼拝だからである。

さらに、教会は世界の出来事に関心が無い。礼拝のため足を速めることは祈つても、地震や洪水の犠牲者のためには祈らない。観念的ではなく体験的な今の若者は、こういう教会の体質になじまない。行動的な青年を生み出さない教会に魅力はないのである。

と同時に、教会学校の生徒が減少したことに注目すべきである。教会学校よりも塾に子供に行かせるようになった知識人の体質がここにも現れていないか。わが国の教会と教会員は、信仰の継承、特に

家庭におけるキリスト教教育に失敗したのであるまいか。いわゆる家庭内暴力を用いる親を見て、誰がその信仰を引き継ぎたいと願うであろうか。

では、どうしたら一%を越えられるか。戦前と戦後で日本は大きく変わったが、最大の変化は憲法である。天皇中心の大日本帝国憲法から民主主義の日本国憲法に変わった。それによって教会も一変したはずである。民主主義の基礎はキリスト教だと主張した筈である。

しかし今日誰が最も民主的なのは教会あるいは教団だと言うであろうか。逆に教会はもともと非民主的な集団だと思われているのではないか。戦前のエリート意識が残っているのが教会ではなからうか。キリスト者の家庭は一般の家庭と比べてより民主的であろうか。

実は先月、ある横浜の大教会でこの講演と趣旨の話をしたところ、或る信徒から次のような質問を受けた。「せっかく高級料理店になったのに大衆食堂にせよ、と言われるのですか」。私はこういうエリート意識を日本のキリスト者からなくせ、と言っ



ているのである。

もともと数週間たって、伝統と歴史ある百貨店が横浜で閉店したと言うので、同じ人が書いてきた。やはり時流を見ないといけない、と。しかしわたしは時流を見ることより、福音の初めを見よといいたい。イエスの分かりやすいたとえ話を聞いたのは「群衆」であり、イエスを十字架につけたのは「律法学者やファリサイ派」というエリートであった。

III

最後に、本学出身の牧師、由木康が三〇年前に書いた「キリスト教信仰」の三類型に言及したい。(一)はイエス型で、神の国を強調し、

シユワイツァーと賀川豊彦に代表される。(二)はパウロ型で、信仰義認を強調、ルターと内村鑑三に代表される。(三)は教会型で、教会形成を強調し、カルヴァンと植村正久に代表される。

この三類型のうち、(二)と(三)は日本で高く評価されてきた。しかし(一)は外国では評価されたが、日本ではそれほど評価されなかった。「世界の常識は、日本の非常識」ということを賀川の評価で痛感したが、私は(一)をもっと評価すべきだと思っている。

(一)が日本で評価されなかったのは、一つには教会が社会的発言や行動をすることを政府が嫌がったからである。それゆえに(二)と(三)は政府に迎合したキリスト教で歓迎された。賀川の「神の国運動」大衆伝道のあと、高倉徳太郎は一九三〇(昭和五)年、信濃町教会の献堂式で「神の国と教会」という説教をしている。「教会は神の国の牙城にならなければならぬ」と。しかし翌年から言わなくなる。満州事変が始まり、「神国日本」が強調されるからである。教会は超越的な弁証法神学を「隠れ

蓑」にして逃げたのであった。しかし、いまや全く自由になった日本で(一)は強調されるべきである。

内村と植村が十字架の死の贖罪を強調したことは知られている。しかし賀川はその贖罪論を実践して贖罪愛を強調したのである。来年は宣教一五〇周年であるが、同時に賀川が神戸のスラムに入った一〇〇周年の記念すべき年でもある。賀川は貧民と大衆に関心を持ったキリスト者であった。

もちろん賀川も時代の子であって、いろいろの限界を持った人であるが、それらを乗り越えて彼の目指した方向に進むときに、一%を越える道も開かれるのではないかと信じている。とくに教団が「教会派」と「社会派」に分裂して対立している状況を克服するのは神の国しかないのではないか。また今日の世界の問題は、愛と義と平和の支配する神の国の到来によってのみ、解決できるのではないか。本学の教授中島重、河上丈太郎を想起すべきであろう。彼らは賀川から感化を受け、社会的キリスト教に影響を与えた人物である。彼らはさらに、昭和初期のSCM

(学生キリスト者運動)にも影響を与えた人物である。そこで、神の国とは何かの問題となる。栗林輝夫教授のいうブッシュ的な神の国ではない。それは「神国」日本のようなアメリカである。「神の国」はR・H・ニーバーのいうように、神の赦しがなければ「神の国」といっても破壊的となる。イエスが教え

また行動した「神の国」とは一体何なのか。一言で言えば、暴力のこの世の支配ではなく非暴力の神の支配である。また、すべての人を格差なく等しく受け入れる社会である。神の国は十字架の贖罪と無関係ではない。神の国の帰結が十字架だからである。十字架は神の国が目指すものなのである。賀川が愛の実践

をしながら、贖罪愛を強調したゆえんである。そのとき教会は日本国憲法を守る力となるであろう。憲法の基礎たる民主主義、人権、平和はみなキリスト教から来たものである。キリスト教が日本の憲法と民主主義というナショナリズムと結びついたときに、一%を越えられるのではなからうか。

第四十回RCCフォーラム講演抄(二〇〇九年四月三日)

パレスチナとイスラエルの平和

— ガザと占領 —

講師：ナウムアテイク司祭



I

話を始める前に、私自身の経歴についてお話をしたいと思います。私はアラブ人です。私はパレスチナ人です。私はまたイスラエル国家の市民でもあります。私はクリスチャンです。みなさんが私の自己紹介を聞いてどのように感じられたかはわかりませんが、私の国で、今言った私の

四つの特徴、つまりアラブ人であり、パレスチナ人であり、イスラエル人であり、キリスト教徒であると言うと、聞いた人は非常に混乱します。通常、アラブ人というと、イスラム教徒である人々は考えます。パレスチナ人と聞くと、最近ではテロリストだ、あるいは自爆テロをやる人だと考えます。イスラエル市民だというと、人々は私



をユダヤ人だと考えます。キリスト教徒と言うと、何時からキリスト教徒になったのかと尋ねます。しかし、イエス・キリストは二〇〇〇年前に生きていた人です。彼はパレスチナで生まれました。つまり私が住んでいる土地です。従って、私の信仰というのは二〇〇〇年前にこの土地でキリスト教を信じていた人まで溯るのです。

II

今イスラエルといわれてい

る国は、一九四八年以前には大部分の人々はパレスチナ人でした。パレスチナ人が大部分を占め、居住していました。その中にはパレスチナ人のキリスト教徒もいるし、パレスチナ人のイスラム教徒もいたし、パレスチナ人のユダヤ教徒もいました。パレスチナの地には、長年にわたって、主に三つの宗教が共存してきました。中東の人々の多くはイスラム教徒です。しかし常にこの地域にはいくらかのユダヤ教徒もいました。またキリスト教徒もいました。従って、一九四八年以前には、様々な宗教的な違いにもかかわらず、ここに住んでいる人たちはパレスチナ人でした。

この地における紛争は十九世紀の末から二十世紀の始めにかけて始まったものです。当時、ヨーロッパに住んでいたユダヤ教徒たちは、キリスト教徒によって迫害を受けていました。そこで一部のユダヤ教徒は、自分たちがキリスト教からの迫害を逃れるために、自分たちの国を作らなければならぬと考えたのです。これらの人たちの一部は、パレスチナに国を作るこ

とを決意しました。しかし、パレスチナに彼らに移るといふことは、もともとそこに住んでいた人たちを追い出さなければなりません。そこでヨーロッパに住んでいたユダヤ人たちが、ユダヤ民族のナシヨナリズム、ユダヤ民族主義を起こしたので。このナシヨナリズムは、シオニズムと呼ばれるものです。このような状況に対して、もともと住んでいたパレスチナ人が、特に第一次大戦後の頃、抵抗を始めました。現在のパレスチナとイスラエルの紛争は、その起源をたどれば、この時期、一九二〇年前後の時期になります。それ以来、暴力的な衝突が拡大し、増大しました。多くのシオニストたちが合法的、あるいは非合法的な手段で、この地にやってきました。一九四八年当時、私たちの家族が住んでいたのは、人口が六〇〇〇人ぐらいの小さな村でした。そこにシオニストの兵隊たちがやってきました。そして、私たち全員を追い出しました。出ていかなければ殺すと、彼らは言いました。結果的に私たちは避難民になりました。私が経

III

験したことは、何百ものパレスチナ人の住んでいた村で起こったことです。追い出したパレスチナ人たちが二度と村に戻ってこないように、彼らはブルドーザーでパレスチナ人が住んでいた五〇〇あるいは六〇〇の村を完全に破壊してしまいました。イスラエルは強力な軍事力をもって、ほとんどの土地を自分たちのものにしました。パレスチナ人たちが住んでいるところは、ヨルダン川西岸地域、それからガザ地域に限定されました。一九六七年の戦争で、イスラエルはさらに西岸地区、ガザ地区をも占領しました。従って、イスラエルとパレスチナの紛争は一九四八年から数えて六二年間、それから一九六七年、占領地が拡大したその期間から数えれば四二年間、続いているということになります。

この紛争に対してどのような解決方法があるのか、簡単にいくつかの点だけ述べたいと思います。第一に、パレスチナとイスラエルの戦争をなくし、平和を実現するためには、この地域全体を一つの国家にする。パレスチナ人とユダヤ人が共存する一つの国家にするのが、正しい解決だと考える人がたくさんいます。しかし、一つの国家をイスラエルは非常に恐れています。イスラエルは強力な軍隊を持っていて、支配する力はあるのです。しかし、一つの国になれば、パレスチナ人は非常にたくさん子どもを生むので、パレスチナ人がいつかはこの国の多数になり、自分た





ちの国でなくなってしまうことを恐れているのです。第二に、一部の人たちは二つの国家による解決を提案しています。つまり、パレスチナ国家とイスラエル国家の二つにすることです。イスラエルの国が存在することを認め、西岸の地域のすべてとガザ地区はパレスチナに返し、パレスチナが主権と国境をもった独立した国家になることを、認めるべきだと主張しています。イスラエル国家とパレスチナ国家を独立した二つの国家にすることです。首都のエルサレムは、両方の国で共有します。そして、パレスチナに住

んでいて追われた人たちが、パレスチナの難民たちが、希望すれば帰還することができると認めるのです。これは国際法によって定められている難民の権利です。私は、「サビール」という団体を作り、イスラエルのパレスチナに対する不当な占領を終わらせるための活動をしています。本来、一つの国家の解決というのが一番いいわけですが、「サビール」としては、現実的な策として、先ほど言った条件をつけた、二つの国家を提案しています。問題はイスラエルがこのような形でのパレスチナ国家を認めようとしません。アメリカの支持を得て、イスラエルは永久的にこの地域全体を支配しようとしています。「サビール」はイスラエルの占領に対して反対し抵抗することを呼びかけています。私たちはクリスチャンとして、この抵抗を非暴力的な方法でやろうとしています。イエス・キリストは非暴力の立場を貫いた人だからです。私が強調したいことは、パレスチナとイスラエルの紛争は終わらせなければならぬし、それは公正な

形で終わらせなければならぬ。そしてそのことを通じて、イスラエル人もパレスチナ人も、ユダヤ教徒もキリスト教徒もイスラム教徒も一緒に共存できる、そういう地域にしなければならないと思います。

講師：ジエフ・ハーバー博士



I

私は「家屋破壊に反対するイスラエル委員会」の代表をしています。私はイスラエル人でユダヤ人です。多くの人々は、パレスチナ人とイスラエ

ル人はお互いに敵だと考えていると思います。実際に私の国、イスラエルは、パレスチナを抑圧しています。イスラエルは、パレスチナの人たちをこの六十年間にわたって抑圧し続けてきています。私はイスラエル人であり、ユダヤ人ですが、私たちの国がやっている間違った行為に対しては声を上げて反対をしなければならぬと思っています。

II

一九四八年に、イスラエルはパレスチナの地の七八パーセントを占領しました。この時、ヨルダンが残りの、ヨルダン川西岸地域を占領し、エジプトがガザ地域を占領しました。次に、一九六七年の戦争で、イスラエルはヨルダン川西岸地域とガザ地域を占領しました。このような経過を経て、現在ではイスラエルがこの地域全体を支配下に置いています。パレスチナ人たちは、イスラエルが一九六七年に占領した地域、ヨルダン川西岸地域とガザ地域において、自分たちの国を作ると



言っています。パレスチナ人は、エルサレムの旧市街地を含むヨルダン川西岸地域とガザ地域、それは歴史的にパレスチナと呼ばれている国の中心、二二パーセントの土地にすぎません。にもかかわらず、イスラエルはそれを認めないのです。イスラエルは、この地域全体を自分たちの支配下に永久に置くと言っています。そのために、イスラエルが今進めようとしているのは、アパルトヘイト、南アフリカで行われた人種隔離政策



です。南アフリカをモデルにしたアパルトヘイトをしようとしています。パレスチナ人たちを、南アフリカで白人支配のときに行われた、バンツースタン計画、要するに一定の土地に閉じ込めてしまおう、隔離する政策を、今パレスチナ人に対してやるうとしています。皆さんはまだ若いので、バンツースタンを憶えていないと思いますが、南アフリカでアパルトヘイト、白人支配の時代に、南アフリカを支配していた白人たちが、今イスラエルが直面しているのと同じ問題に直面しています。南アフリカの白人が支配する「民主主義」をどのように作るかという問題です。つまり人口の過半数が黒人であるのに、白人が支配する、

白人が支配してかつ民主主義的なシステムをどのように作るのかということに悩んでいました。そこで南アフリカの支配者たちが考えたのが、一〇のバンツースタンと呼ばれる独立地域をつくることです。全部合わせて南アフリカの国土の一パーセントに過ぎない非常に小さな、一応名目上は独立国家を作って、そこに黒人を住まわせたのです。一つ一つの国、バンツースタンは南アフリカの面積のわずか一パーセントに過ぎません。南アフリカに住む多数民族である黒人たちはそのバンツースタンに押し込められました。黒人たちは隔離した結果、残った八九パーセントの国土の中で、白人たちを中心にする民主主義ができる、そういうシステムです。今イスラエルがパレスチナ人に対してやるうとしているのは、それと同じ政策です。イスラエルに住むパレスチナ人の九五パーセントは、パレスチナ人であれば、パレスチナ人の九五パーセントは、西岸地域の四〇パーセントに住んでおり、その西岸地域自体がイスラエ

ル全体の中では二二パーセントに過ぎません。全体の二二パーセントの中の四〇パーセントの中に住んでいます。非常に小さい国のそれだけの割合のところを押し込められています。また、イスラエルの西岸の占領地の中に五〇万人のユダヤ人が入植しています。イスラエルはこの入植地を永久に固定したいと考えています。入植地というふうに言えば、何か小さな地域社会が丘の上のかなにかにあるかのような印象を与えるかも知れませんが、実際には入植地といえるのは、非常に大きな都市になっていきます。入植地を作ること、パレスチナ人相互の行き来を阻止する役割を果たしています。

III

占領のもう一つの側面をよく表しているのは、イスラエルがパレスチナの地に建設している隔離壁です。この壁は、イスラエルの安全のために作られているわけではありません。壁は二つの役割を持っています。一つはパレスチナ人たちの住む居住区を取り囲

んでしまうことです。イスラエルが作っている隔離壁は、ベルリンの壁の高さの二倍です。昔アメリカのレーガン大統領もベルリンの壁には反対しました。その当時、レーガンは、当時のソ連邦のゴルバチョフに対して、この悪魔の壁を取り払うべきだと進言しました。ベルリンの壁は高さが、僅か四メートルです。イスラエルが作っている隔離壁は高さ八メートルあります。長さも、イスラエルが作っている壁はベルリンの壁の五倍です。ベルリンの壁はまっすぐです。イスラエルの壁は中の人たちを取り囲んでいきます。何十万人のパレスチナ人たちが、この壁によって、その市の中に監獄のように閉じ込められているのです。トウルカレムというパレスチナ人の住む市では七万人の住民が完全にこの壁に囲まれていきます。出口は、わずか一箇所です。この壁は、イスラエル人とパレスチナ人を分断しているのではありません。イスラエル人たちは、自分たちの近くに壁があるのを好みません。壁はパレスチナ人が住んでいる区域に食い込む形で作られています。ユダヤ人を守

るために壁が作られているのではなく、パレスチナ人たちを閉じ込めるために壁が存在しています。壁は大学キャンパスの真ん中を貫いています。学生たち、先生たちも教室に入れなくなっています。こういう壁が七五〇キロにわたって作られています。

イスラエルが今目指しているのは、この二つに完全に分断されたバンツースタンによる支配です。この解決案はパレスチナ人に対する抑圧を継続し、永続化するものです。それはまた同時に、世界のシステム自体を不安定にすることに他ならないのです。

編集後記

宣教「一五〇周年」の講演では、東京から古屋先生においでいただき、持論の「一%を超えられるか」についてユーモアを交えて、お話ししていただきました。パレスチナの講演者、お二人は日本聖公会の招きで来日されました。パレスチナとイスラエルの平和は可能か。私たちはどこに立つのかを問いかける講演でした。

商学部教授 RCC主任研究員

山本俊正